
人形ライフ

うしおなとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形ライフ

【Nコード】

N1138N

【作者名】

うしおなとら

【あらすじ】

こんな転生もたまにはいかが？誰か執筆してくれたらうれしいなあ。

『のほほん』が上手く書けないストレス発散、ネタはあるのに文章が上手くいかない！！

「ハーハッハッハッハッハ！！！」

闇夜に響く高笑い。

何が楽しいのかわからんが、そいつは酷く楽しげだ。

「ひっ怯むなアアア！！」

「押しかえせ！正義は我らに在りだ！！」

そんなそいつ……なんて言ったら怒られるか。

我が偉大なる御主人様は必死になって向かい来る人垣、そこに対し
て冷徹なる一撃を放つ。

ぶつぶつと、高速で紡がれていく祝詞。

言葉は方向を指し示し、導かれた力は集まり暴力へと変貌する。

カツ！と目を見開き手をかざす。

刹那放たれる闇と氷の嵐は空間を貪り、血眼になって築き上げた障
壁を紙切れのように破り捨ててゆく。

重装備の男は削り取られ、軽装の男は弾け飛ぶ。

嵐は尚も進みゆく。

紅い雨を纏ったそれは集束されていた身体を次第に解放し、拡散す
る。

急激に射程域を伸ばしたそれに対応しきれなかった者たちは、氷と
闇の矢に身を貫かれる。

「この程度か！！噂に名高い魔法界の騎士どもは……この程度か！！！」

ハイになつてゐるねえ。

金色の髪をたなびかせ、声高らかに叫ぶ御主人。

目の前の奴らのレベルの低さに嘆いているのか、どこか苛立ちが垣間見える。

まあ自称最強の魔法使いな御主人にとつちやあ最強と銘打たれたやつらが弱かったんじゃあ苛立つか。

プライド、高いかなあ。

「ほう、あれは……？」

「舐めるなバケモノ！この鬼神兵の前に……ひれ伏せ！！」

うわうわうわ、なんか来ちゃったよ。

でつかー、高層ビルくらいあるんじゃないの？

アレ？名前あつてたっけ？

とにかくデカイなあ。

天高くそびえ立つとはこのこと、とでも言わん大ささ。

光る巨体に長い手足、スラリとどこか不釣り合いなその姿。

「ハハッ！あれが光る化け物の正体が……面白い」

ニヤリと口元を歪める御主人。

心底楽しそうに、彼女は嘲るように笑う。

どこか童女を思わせるその姿。

いまや楽しそうなおもちゃを見つけてはしゃぐように見える。

もう本当に幼子のようなだ。

「おい貴様ら、アレを少しの間止めてろ」

こちらを一瞥して、言い放った御主人。

それは命令ですか？なら了解です。

「ケケケ、ショータイムツテヤツダナ」

隣の同僚、もとい恋人？いやいや奥さんもまたとても楽しそうだ。

綺麗な翡翠の髪、同色の瞳は凶暴な色に塗りつぶされて。

べつとりと血糊のついた身の丈を超える鉈と、身の丈ほどのナイフを片手にケタケタ笑う。

不意にグイッと身体を引き寄せられて、唇と唇が触れ合う。

触れ合うだけの簡単なもの。

だが何となく満足がいかない。

「ッテ舐メンナ！」

「癖でなあ」

嫌がつてる風でもないよう。

どうせならもうちょっと……。

「イチヤつくなら帰ってからにしろ」

「ケケケ、テメエ二旦那ガイネエカラッテ嫉妬力!!」

「ええい黙ってる!!」

からかいを凍てつくような視線で返した御主人。

ケタケタ笑う奥さんを見れば、それが今までと変わらぬいつもの事とわかってしまう。

「帰ッたら続キシヨウゼ」

「おーし、じゃあ俺頑張ってみる」

魅力的な提案に握る拳に力を込める。

右手に持つのは超重量の巨大な戦斧、左手に装着したのは手首から上を覆う獣のような爪。

御主人から送られてきた魔力を元にその切っ先は鋭く伸びている。

「ヒヤッハアアア!!」

「行きまゝす」

蝙蝠の羽を背中から生やし、陣風のように空を翔ける奥さん。

ツルツルの脚から鉤爪を生やし、暴風のように地を駆ける自分。

「撃ち落とせエエエ!!」

空をゆく奥さん目掛けて放たれる魔力の弾丸。

けどそれは彼女を躊躇わせることも出来ず、一刀の下に切り裂かれ四散する。

「邪魔……ダゼツ！」

箒に跨り接近する相手方を次々と物言わぬ肉塊に変え、縦横無尽に彼女は行く。

「コノ『チャチャゼロ』様ヲ止メレルヤツハイネエノカ！！！」

今まさに、ゼロは空で一番だった。

だったら自分も、地で一番になって見せよう。

「トマホオオオオク……ブウウウメラアアアアアンツツツツ！！！」

前の御主人が叫んでいたみたいに、吼える。

あったならば血管がはち切れそうになる声量とともに、右手の戦斧を投げつけた。

投擲されたそれは触れるものを押し切り、進む。

開いた穴へと、自分は突っ込んでいく。

目の前に見えた巨人の脚、それを爪で切り裂く。

思っていたより容易に行われたそれにより、巨人は大きくバランスを崩して行った。

「馬鹿な！！！」

何か叫ぶ男の声。

それを耳に突き上げるように再び右手を振るう。
三本の軌跡が、巨人の脚に描かれた。

「サスガ俺ノ男ダゼ!!」

喜々とした声で叫ぶゼロ。

グルグルと回転しながら彼女は巨人の腹に近づき、粉碎機のように二つの刃でミンチを作り上げた。

倒れかけの巨人。

それを足場に飛び上がり、弧を描くように戻ってきた戦斧を掴み、振り下ろす。

巨人の頭は真つ二つに切り裂かれた。

「準備完了だ!……って終わってるではないか!!」

不満そうな声の御主人。

「……いい、喰らっとけとりあえず……『おわるせかい』」

瞬間あたり一面を氷が埋め尽くした。

「なんか、不満だな」

ぶつくさ文句を言いつつ空から舞い降りて来た御主人。
叫んでいた人間は今や物言わぬ氷像。

カッチカッチのその中で、驚愕の表情を浮かべている。

「……帰るか」

そんな言葉とともに、自分たちは家へと歩みを進めたのだった。

「ああ、メンテは必要だからとりあえず取れ、お前ら」

「アイサー」

「了解です」

御主人の言葉とともに手を、足を、頭を外していく自分たち。

「ケケケ」

ごろごろ自分と同じく首だけになったゼロが目の前で転がっている。

「さすが私の最高傑作どもだな！！」

再び高笑いする御主人。

魔法の糸が通される身体を、ぼんやりと眺める自分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138n/>

人形ライフ

2010年10月12日05時09分発行